

「Stanの思い出」

疾患酵素学研究センター・免疫病態研究部門

松本 満

先日、ある国内の学会から設立50周年記念誌が届き、私が知りえなかったStanの最期の様子を知ることが出来ました。お名前だけは存じておりましたが面識はなく、S先生がStanley J. Korsmeyer博士の研究室に留学されていたことも私は知りませんでした。Stan (Korsmeyer博士) はBCL2をはじめとする一連のアポトーシス研究で輝かしい業績を残したアメリカ人研究者です。Stanと共に苦労を重ねながら、素晴らしい研究を成し遂げられたS先生の留学生生活を羨ましく思いながら読ませていただきました。残念ながらStanは、今から6年前、肺癌のために54歳で亡くなりました (Science 308: 803, 2005)。S先生の文章には、Stanの真摯かつ誠実な研究への取り組みの姿勢とともに、彼がどんなに素晴らしい人柄の持ち主であったかが語られており、一緒に研究したことのない私が漠然とStanに対して思い描いていた理想の研究者像がそこにありました。

私がStanをよく知ることになったのは、S先生の留学から遅れること5年、1993年からの3年間、ワシントン大学 (Washington University: ミズーリ州・セントルイス) に留学した時のことです。私の研究室は彼の研究室の隣でした。Stanは、S先生が帰国された直後にワシントン大学に移って来たようです。さらに私が帰国した後、Stanはハーバード大学に移りましたが、ワシントン大学時代は勿論のこと、その後の活躍は目を見張るばかりで、さすがStanだなあと、いつも感心していました。

私は留学する前から、Stanがワシントン大学にいることを知っていました。留学に係る手続きをしていたおりに、私のポストとStanがオフィスを共用していることを知り、あのStanと同じフロアで研究することになるのか、と思ったことがあります。その留学からさらにさかのぼること数年、Stanは日本免疫学会総会に招待されていました。座長が誤って彼の所属をUniversity of Washington (日本では、こちらもワシントン大学と呼びますが、別の大学で、ワシントン州・シアトルにあります) と紹介したことが、私がStanを知ることになった最初でした。この時のStanは、はにかんだ笑顔を見せていました。まるで踏みしめるように、少し大股で壇上を歩く彼の姿がなぜか記憶に残りました。その時のStanの講演は、T細胞抗原受容体やB細胞抗原受容体の遺伝子再構成をサザンブロット法によって検出し、リンパ性白血病の起源を探るといったものだったと思います。こうした方法が、当時、私のいた血液内科でも白血病のタイプを決めるために用いられるようになっていたため、この人が、こういう方法を考え付いたんだ、という思いがけなさと、敬意を込めた親近感を覚えました。ごく当たり前のことですが、自分達が日頃使っている検査や実験手技は「誰か」の手によって作り出されたものです。しかし、それを生み出した「誰か」の顔を実際に見ることは、とても楽しく嬉しい出来事です。留学してみると、何とStanの実験室の一番端の実験台が私の研究スペースとして与えられ、まるで私も彼の研究室のメンバーであるかのような状態でした。とは言え、Stanが実験室に足を運び入れる姿はあまり見かけませんでした。

彼はアメリカ人にしては少し小柄でしたが、とても端正な顔立ちで、聡明さの中にも柔和な人柄を隠せない素敵なお人柄を持つ人でした。私が隣の研究室のメンバーだと知っていて、たまに廊下ですれ違えば、必ずウインクをしながら、ニコッと微笑んでくれるのです。眼鏡の奥に見える理知的な目がとてもチャーミングで、今も鮮明に覚えています。アメリカ人は休日にはめったに仕事に出て来ないと聞いていましたが、休みにもかかわらず脇にたくさんの書物を抱えたままオフィスのドアの鍵を開ける彼の姿を見て、ああこの人は本当に研究が好きなんだなあ、と感じました。

ハーバード大学に移った後に始まった闘病生活、それでも衰えることのなかった研究への情熱。S先生は、何度かStanのお見舞いにも行かれたようです。S先生のみならず、Stanを取り巻く多くの人々の彼に対する深い敬愛の念が十分過ぎるほど伝わって来ます。偶然に知ることとなり、ただ隣の研究室にいてたまに顔を合わせるくらいのことしかなかった私にさえも、あのチャーミングな笑顔の源がよく理解できます。そんな彼を慕い、今も毎年、Stanley J. Korsmeyer Memorial Lectureがワシントン大学時代の同僚達によって開かれているようです。私とStanの関係は、S先生の深い結びつきとは比べようありませんが、隠れた彼のファンであり、その活躍を誇らしく眺めていた一人として、あらためてStanは忘れ得ぬ、私の大好きな研究者です。